

第3回 SPARC Japan セミナー2014

「オープン世代」の Science

「若手アカデミー」というプラットフォーム

駒井 章治

(奈良先端科学技術大学院大学)

講演要旨

グローバル化し複雑になった現代社会において情報は氾濫し、その多様性は歴史的にも類を見ない状況になってきている。ガジェットは多様化してどこにいてもオンラインとなり、まさにユビキタスな時代となってきている。しかし一方でコミュニケーションの形態は断片化し、思考が深まらないという声も散見される。時代の流れは後戻りできない。まもなくネットネイティブ世代が学術の中心的役割を果たすようになる。来る次世代を踏まえてこれからの学術ネットワークやプラットフォームについて考えてみたい。



駒井 章治

2008年より奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科准教授。1993年上智大学卒業(心理学)、1997年奈良先端科学技術大学院大学修士課程修了、2000年同バイオサイエンス科博士課程修了。その間、京都大学、大阪大学、大阪バイオサイエンス研究所に勤務。神戸大学医学部、マックスプランク医学研究所にてPDフェロー。1年半の準備期間を経て、2011年より日本学術会議若手アカデミー委員会委員長に就任。

私は奈良先端科学技術大学院大学に所属する他、日本学術会議で若手アカデミー委員会の委員長をしていますので、これまで行われていたクラシックな研究と、その若いところのインターフェースになるような組織を動かすという立場でお話しいたします。

研究不正と研究支援

「研究不正」という4文字に、昨今いろいろと触れられたかと思いますが、こういう事態が起こり得るのも、今までの多くの研究のひずみが出てきているからだとは理解しています。

ただ、この研究不正は、あるところからは、締め付け、規制を強くしろなどいろいろな問題が出てきていますが、よく考えてみると、例えば泥棒を捕まえるために法律を厳しくして泥棒がなくなりましたかと

いう話と似たようなものだと思うのです。きつくしたからなくなるかということ、そういう問題ではなくて、ある一定の割合は起こり得ると思いながら研究を進める方がいいのではないのでしょうか。むしろ視点を変えて、もっと楽しく研究ができるようなアカデミックの業界にしてやればいいのかというのが私の考えで、研究支援をサポートしてやればよいと思っています(図1)。

よく研究者に「研究はどうですか」と話を聞くと、研究費がない、ポジションがない、研究サポートの人材がないというのですが、よくよく考えてみると、実は時間がないということなのだとは理解しています。というのは、これは、研究者としては自分の好きなことをしっかりよく考えて進めたいと思っているにもかかわらず、いろいろなことができないということを反

映しているのではないかと、つまりヴァナキュラーな価値、機会費用の問題が非常に強いのではないかと思います。

では、時間をたんまりあげてお金もポジションもあげてというのが良いのかというと、そうすると働かなくなってしまう人が出てきてしまいます。ですから、一定の評価が必要です。ただ、ここで言う評価とは過去ベースの評価ではなくて、未来志向のビジョナリーな評価があった方がいろいろなクリエイティブな仕事が出てくるのではないかと私自身は思っています。そういう評価の上で競争を続けていく必要があります。

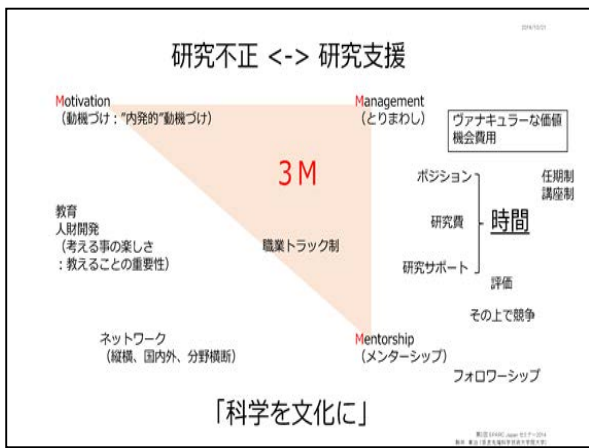
「研究、研究」というのですが、研究を進めていく上でいろいろなサポートの人材が要ります。研究できなかったらドロップする、ドロップすると「あいつは駄目なやつだ」というのではなくて、いろいろな形で認めるようなトラック制も必要です。そのためには、マネジメントする能力、トップに立つ研究者（PI）たちが組織を取り回すような能力も必要であると思います。そのためにはメンターシップの能力、そしてフォローする人たちにはフォロワーシップの能力が必要になってきます。これまで任期制や講座制で培われてきたはずのいわゆる教育、人材開発だったのですが、これがどんどん崩れてPI制になってきています。そうすると、教育を誰がするのだという話になるのですが、「あの先生は熱中してやっているから、研究がすごく面白そうだね」ということを見て学ぶことができないわけです。それを担保するために、やはりネットワー

クが必要なのではないかと私は思います。国内外、それから分野を横断して、横だけでなく縦も、シニアの先生方も、もっともっと若い人たちも、いろいろなネットワークを広げていろいろな背中を見る必要があります。

それがひいてはモチベーションにつながります。何をするにしても、やはり面白いと思うことが一番根っこにあると思うのです。研究者は、初めはそこから始まっているはずなのですが、お金を取る、良い論文を出すという手段が目的になってしまうことが結構あるのです。そうではなくて、もともと若いときに面白いと思っていたことを常に思い続けてやれるような、あるいは、もともとと思っていたことではなくても、どんどん違うことを面白いと思って研究が続けられるような環境を作ったらどうでしょうか。アカデミックの立場からいっても、学会会議という偉い先生方がたくさん集まっているところに対しても、私はこのように言いたいのです。そういう意味で、われわれの若手アカデミー委員会が組織されたのではないかと考えています。お話を伺っていると皆さんが面白そうにやっつけらっしゃるということがひしひしと伝わってくるので、われわれもそういうものをどんどん吸収して動いていきたいと思っています。

そこでまとめたのが「3M」です。「科学を文化に」ということで、科学を科学として別個のものとして見るのではなくて、科学はその辺に転がっているものであって、それを享受している皆さん自身のそれぞれの気持ちも盛り上げていただきたい。研究者自身も当然そう思いながら仕事を進めていく必要があるかと思っています。

そうすることで研究不正もオープンになって、どんどん皆さんにつついていただくこともできますし、われわれ研究者としてもつくこともできますし、いろいろなことができるのです。皆さんの声を聞きながら研究することも、逆にわれわれ研究者の発表成果を皆さんに見ていただくこともできてくると思います。つまり、岩崎先生などがされているアートも間に挟んで



(図 1)

いくと、もっとなじんでいくのではないかと思います、われわれも、東京芸大の皆さんとコラボレーションしていろいろな活動をしようと思っています。そんな中で動きつつあるアカデミー活動の一端をご紹介しますと思います。

日本学術会議若手アカデミー委員会の概要

私は今、日本学術会議で仕事をしています(図2)。日本学術会議は六本木の国立新美術館というすてきな美術館の隣の建物の中にあります。学者の議会といわれており、一応、内閣府の外郭団体として組織されています。国の組織なのですが、研究者が2,210人、メンバーとして集まっています。一番有名などころでは非核三原則のようなものを考えて発表しています。また、震災に絡めたいろいろな提言も出しています。

若手アカデミー委員会は現在29名しかいませんが、哲学から数学まで、いろいろな分野から若手研究者が集まっています。私自身は脳科学、神経科学をやっているのですが、法律の人など、さまざまなディシプリンの人が集まって、日本のこれからについてなど、いろいろなことを議論しています。例えば将来の何かが起こってから議論していたのでは遅いので、何が起こり得るかということをいろいろな形で議論しています。去年はミーティングが6回ありました。2カ月に1回ぐらい、顔を合わせて話をしたり、ウェブを使ってミーティングをしたりしています。ただ、29人では少し物足りないということで、2012年12月に日本

国内の若手研究者のネットワークを構築しました。各学協会の若手の会の代表の方に名乗りを上げていただき、今のところ86団体の代表の方に参加していただいています。つまりその下には何百人、何千人というメンバーがいるということです。このネットワークがどんどん広がっています。

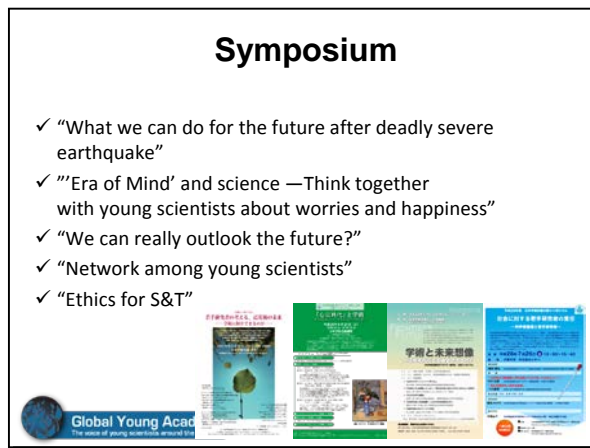
シンポジウム、ワークショップの開催

こういうネットワークを使って、「大震災後、若手に何ができるか」「心の時代」といったシンポジウム等々も開いています(図3)。また、総合学術としての議論をしたい、工学や医学などという分け方のシンポジウムをするのではなく、どこの学会にもものらないようなすごく学際的なことをしたいということで、「学術と未来想像」など、いろいろなシンポジウムを開催し、いろいろな観点から議論しています。

それから、われわれだけだと自己満足に終わってしまうので、大学生や高校生ぐらいの若い学生たちも巻き込んで、「あなたたちは2050年に何をしたいですか」という話を考えてもらい、われわれも「そういうアイデアはいいね」「そういうアイデアだったらこうしたら面白くなるかも」などと言いながら、人と議論をして自分で考えを持ち、その中からすてきなアイデアが出てくるということを学んでもらっています。これが学術の基本だと思っていて、われわれは、いわゆる科学実験をしない科学教室のような形で開催しています(図4)。これは結構好評で、例えば高校生の間で一



(図2)



(図3)

つ出てきた案は、2050年に交通が発達してほしいというものです。旅行にびゅっと行けるなどの簡単な理由でそう思っているのかなと聞いてみたら、コミュニケーションツールとして交通を発達させたいと言うのです。つまり今、ネットネイティブの若い学生さんたちが、実際には対面で話をするのがすごく大事だと思っていて、ネットネイティブだからこそ、自分たちが大人になったときにそういうものを充実させたいと思っているということです。そういうことを聞くと、やってよかったと思うのです。

国際関係

国際的にもいろいろなところに参加させていただいています。特記したいのは、グローバルヤングアカデミー（GYA）への参加です（図5）。これは世界レベルで動いているもので、われわれの日本学術会議若手

アカデミーの世界版のようなものです。いろいろな国で総会を行っており、今年はチリで行いました。メンバーはアメリカや南アメリカ、ヨーロッパが主ですが、アジアからもたくさん入っており、現在200名います。学際的で、文系（人文学、法律、経済学など）のメンバーもいますが、多くは物理、生命科学です（図6・図7）。

活動内容としては、われわれは研究者なので、まずは現状を知ることから始めないと、エビデンスに基づいて文句を言えないということで、世界レベルのネットワークを使って調査をしています。その調査結果は「Nature」誌などにいろいろな形で発表しており、コメントやリサーチのパブリケーションなども行っています。それらのエビデンスをもって国連にもアドバイザリーボードとして出向いています。

また、その他の国際機関とも一緒に活動しています



Workshop

✓ Workshop “Think together with young scientists about the future of you and Japan”

Every year since 2011

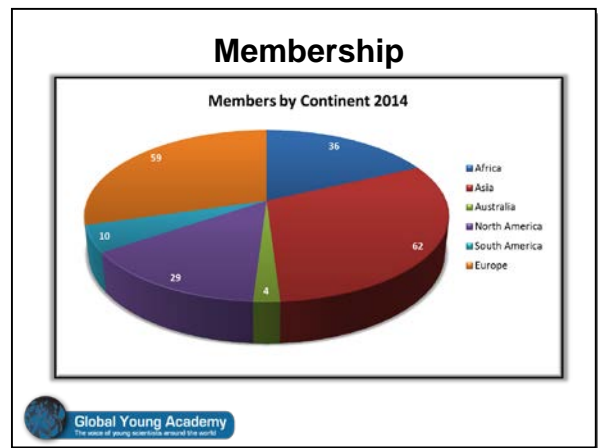
Theme: “Science and Technology in 2050”

Attendees:
High school and undergraduate students
High school teacher etc.
and young scientists of Universities

Eg. Importance of transportation as a communication tool even in the society where we thought to be addicted to internet.

Global Young Academy
The seed of young scientists around the world

(図4)



(図6)



Who we are

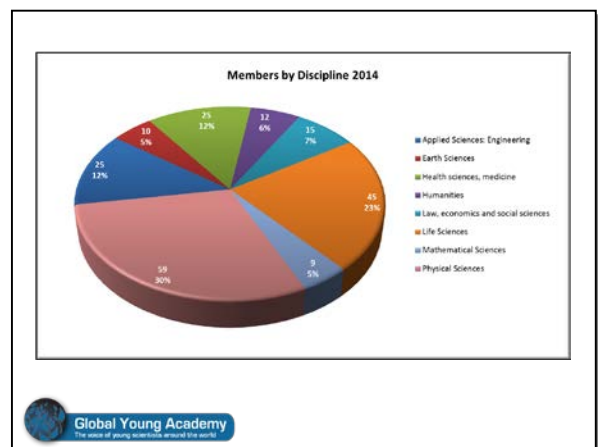
• An academy of 200 early career researchers (meaning roughly within 10 years of PhD) representing all major regions around the world

• Selection criteria:
– Research excellence
– Commitment to service/outreach

• Your best bet on the global scientific leadership in the next 5-15 years

Global Young Academy
The seed of young scientists around the world

(図5)



(図7)

(図8)。UNESCOはご存じかと思いますが、IAPは世界のシニアのアカデミーの世界連合のようなものです。そういうところにも顔を出して、若手としてこういうことを考えている、若手はこういう現状だということをおっしゃっていただいて、状況改善に努めています。

それから、Regional Meetingを世界のいろいろな地区で行っています。今年はアジアでも行い、学術会議の大西会長にも来ていただきました。

このような形で、世界の動きとしては、若手のお尻をたたいて、もっと学術全体、世界全体を元気にしていこうという動きが起こっています。そういうところに呼んでいただいて、もっとどんどん変わっていくようなことを吸収しつつ、伝統的な学術領域も変化させて、より良い成果を出していける環境をつくる活動を進めていきたいと考えています。



(図8)